

珍しい、義民・義賊の文字塔

佐倉宗五郎 — 神田

だいぶ前のこと、神田・田代の原田照爾さん(故人)から「隠居屋跡の古い井戸と池を埋めたいが、そばにある石塔の処分に困っている。欄干様には拜んでもらったが……」と言う電話があった。

見に行くと、それは「佐倉宗五郎大明神」と彫られた石塔だった。通称「佐倉宗五郎(本名惣五郎)」は、江戸前期の代表的義民として知られる人である。「明治四十二年五月吉日原田さんと建之」とある。照爾さんは、

「なぜ、宗五郎を祀ったのかよく分からないが、ただ先祖の『さ』と『は』、大の芝居好きだったそうだと話してくれた。

江戸時代、下総国(現在の千葉県)の佐倉藩主の過酷な年貢の取り立てに、領内公津村の名主であった惣五郎は承応二年(一六五三年)上野寛永寺に参詣する四代將軍徳川家綱に直訴した。



「佐倉宗五郎大明神」の石塔

その結果、願いは認められたが、惣五郎夫妻は礎となり、子

も死罪になった。

このことは、江戸中期以降、物語や芝居に取り上げられ、惣五郎は義民として広く知られるようになった。

旧津具村に江戸末期から明治期の農民の暮らしについて聞き書きをした記録があり、その中に「地狂言」や「村狂言」などと呼ばれた素人による芝居(歌舞伎)が盛んだったことが記されている(外部から招く「請け」と呼ぶ芝居もあった)。

演目として「義経千本桜」や「歎進帳」などのほかに「佐倉宗五郎」がある。当時各地でもこうした芝居があったと言われているので、芝居を通して惣五郎を知った人もあったと思われる。芝居が好きだったと言われるさきさんも、そうした一人で「己を捨てて村を救った惣五郎に心打たれ石塔を建立したのではないかと思う。

(現在、「佐倉宗五郎大明神」の石塔は奥三河郷土館に寄贈されている)

なお、「佐倉宗五郎」の文字塔は「基盤石山」の山頂近くにも祀られていたと思うが、当地方では数少ないものである。

鼠小僧次郎吉 — 平山

平山公会堂裏に、いくつかの

石塔がある。その中に「ねずみ小僧」と彫られた一体があり、「明治三十八年四月八日 金田喜七 建之」と読める。



「ねずみ小僧」の石塔

少し前、NHKテレビで「鼠、江戸を疾る」が放送され人気を呼んだ。ご存知のようにこの場合の鼠は通称「鼠小僧次郎吉」のこと、大名屋敷を専門に荒らし、盗み取った金を貧乏人に分け与えたと言いういわゆる義賊と呼ばれる伝説の盗人である。

鼠小僧次郎吉は本名「次郎吉」で、江戸時代後期に実在した人物である。

建具職人、鳶人足などをしていたようであるが、不行跡で、二十五歳のとき、父親から勘当され、その後、賭博で身を持ち崩し、長年、盗人稼業に走ったと言われる。彼は二回捕まえられるが、一回目は、「初めてだ」と、うそを言って逃れ、入墨を入れられて追放。やがて戻って、二回目に捕らえられた時に市中引き回しの上獄門となった(天保三年九月・一八三二・享年三十六)

彼が捕らえられた時、役人が家宅搜索をしたが、金銭はほとんど見つからず、金の行方が噂

になった。このため、困っている人たちに分け与えたのでは……と言う伝説が生まれたと言われている。

また、当時の重罰には、連座制が適用されたが、勘当されて肉親とも縁が切れていたこと、それに妻にも離縁状を出していたため、多くの人を巻き込まず、一人だけ刑を受けていることなども、義賊伝説になった理由の一つとの説もある。

なお、武士が絶対であった当時、大名屋敷を専門に、徒党を組まず、一人で盗みに入ったことは反権力者として喝采を受けたのではないとも言われている。



歌舞伎「鼠小僧」安政四年初演目

さて、この「鼠小僧次郎吉」の石塔がなぜ建立されたのか喜七の曾孫に当たる金田正美さんに訊ねてみたが、「なにか願い事でもあったのかどうか、建てた理由はよく分からない」と言うことだった。

しかし、窃盗という犯罪は別にしても、たとえ伝説であっても、「弱きを援け、強きを挫く」とも言うべき義侠心に感じてのこともかも知れない。

「鼠小僧次郎吉」は歌舞伎でも

上演されているので、その影響が、何らかの形で、この地にも及んでいたと考えられる。「ねずみ小僧」の石塔も「佐倉宗五郎大明神」と同様、この地方にはごく珍しい文字塔の一つである。

(設楽町文化財保護審議会委員)

金田喜兵衛